

2004 年 3 月

40～64 歳の女性 850 名に聞いた 親への援助行動と負担感

第一生命保険相互会社（社長 森田富治郎）のシンクタンク、第一生命経済研究所（社長 石嶺 幸男）では、40～64 歳の女性 850 名を対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

このほど、その結果がまとまりましたので、ご報告いたします。

目 次

アンケート調査の実施概要	1
【娘が親に対して行っている援助内容】	2
【親に対して援助することへの負担感】	3
【親に対して行っている援助内容について負担を感じる割合】	4
【親側の特性別からみた負担感割合】	5
【娘側の特性別からみた負担感割合】	6
【負担感に影響を及ぼす要因は？】	7
【援助負担感は生活満足度を引き下げる】	8
【研究員のコメント】	9

＊この冊子は、当研究所発行の調査月報、「ライフデザインレポート」の3月号の要約です。
「ライフデザインレポート」を3月号ご希望の方は、
右記の広報担当までご連絡ください。

お問い合わせ

株式会社第一生命経済研究所
ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当／岸
〒100-0006
東京都千代田区有楽町 1-13-1
TEL. 03-5221-4772
FAX. 03-3212-4470

アンケート調査の実施概要

1. 調査地域と対象 全国の 40～64 歳の女性
2. サンプル数 850 名
3. サンプル抽出方法 第一生命経済研究所生活調査モニター
4. 調査方法 質問紙郵送調査法
5. 実施時期 2003 年 10 月
6. 有効回収数(率) 815 名 (95.9%)
7. 回答者の属性

対象者の結婚状況

(単位: %)

既婚	離婚・死別	未婚	不明	サンプル数(人)
85.4	9.0	3.3	2.3	815

親の生存状況(年齢別)

(単位: %)

		n	父親	母親
自分自身の親	40～49 歳	331	62.2	88.2
	50～59 歳	314	24.5	60.8
	60～64 歳	149	7.4	36.9
	全体	815	36.7	67.0
配偶者の親	40～49 歳	301	54.8	81.1
	50～59 歳	271	14.4	47.2
	60～64 歳	122	3.3	18.0
	全体	713	29.7	56.1

注: 配偶者の親については、未婚者、離婚・死別者がいるためにサンプル数は減少する

娘が親に対して行っている援助内容

「日常的な話し相手になる」をあげた割合は3割前後と最も高い。

図表1 親に対するこの1カ月間の援助内容 (親別・複数回答)

(単位: %)

援助内容		自分の 父親	自分の 母親	配偶者の 父親	配偶者の 母親	平均 割合
生 活 的 援 助	食事の準備や後かたづけ	15.1	17.4	8.5	12.3	13.3
	掃除や洗濯	12.0	14.3	7.1	9.3	10.7
	日用品の買い物	10.4	22.3	6.1	14.0	13.2
	散歩や外出の付き添い	3.3	11.2	1.9	4.0	5.1
	身の回りの世話	4.3	7.0	3.3	6.3	5.2
	排泄や入浴の世話	1.0	3.8	0.5	2.5	2.0
	病院や施設等への付き添い	6.0	12.3	1.4	6.0	6.4
	直接会って日常的な話し相手になる	36.5	43.6	14.2	26.3	30.1
	電話等で日常的な話し相手になる	26.9	46.9	14.2	22.0	27.5
	直接会って心配事等の相談相手になる	7.8	21.8	3.8	9.5	10.7
情 緒 的 援 助	電話で心配事等の相談相手になる	9.2	21.8	2.8	7.8	10.4
	介護保険について教えたり、調整する	4.8	5.7	2.4	3.8	4.1
	その他	6.1	7.9	4.7	7.5	6.6
どれもない		42.9	21.6	64.6	46.8	44.0
n		299	546	212	400	

注: 平均割合とは、4人の親に対して援助している割合の平均

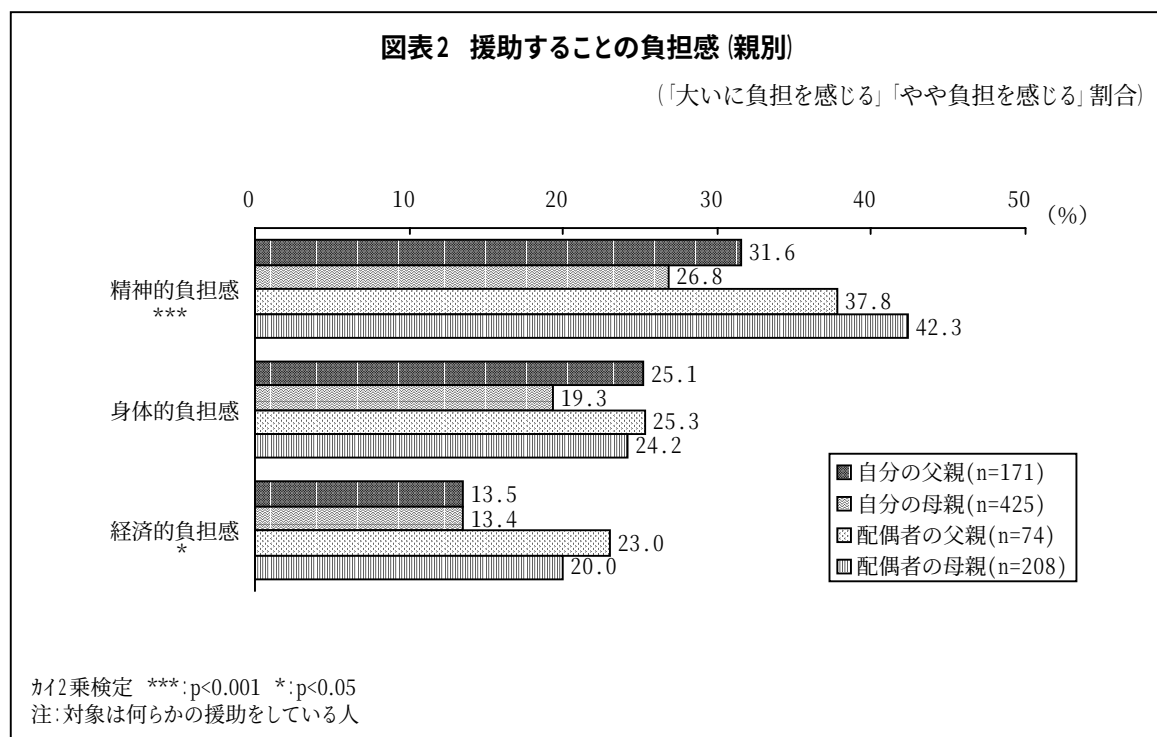
直近の1カ月の間に、娘が自分及び配偶者それぞれの親に対して行っている援助の内容について聞いてみました(図表1)。

その結果、最も多く行われている援助は「直接会って日常的な話し相手になる」(30.1%)であり、ついで「電話等で日常的な話し相手になる」(27.5%)でした。生活的援助の中では「食事の準備や後かたづけ」「日用品の買い物」が約13%と高くなっています。

また、「(援助内容が)どれもない」という回答結果に着目しますと、最もその割合が高いのは配偶者の父親でした。この結果から、娘が配偶者の父親へなんらかの援助をしている割合は35.4%に過ぎず、一方で自分の母親へなんらかの援助をしている割合は78.4%にも上りました。

親に対して援助することへの負担感

配偶者の母親へ援助することで精神的負担を感じる割合は4割に上る。



親に対して援助を行うことについて、娘本人が負担に感じているかを精神的負担感、身体的負担感、経済的負担感の3つの側面から調査しました（図表2）。

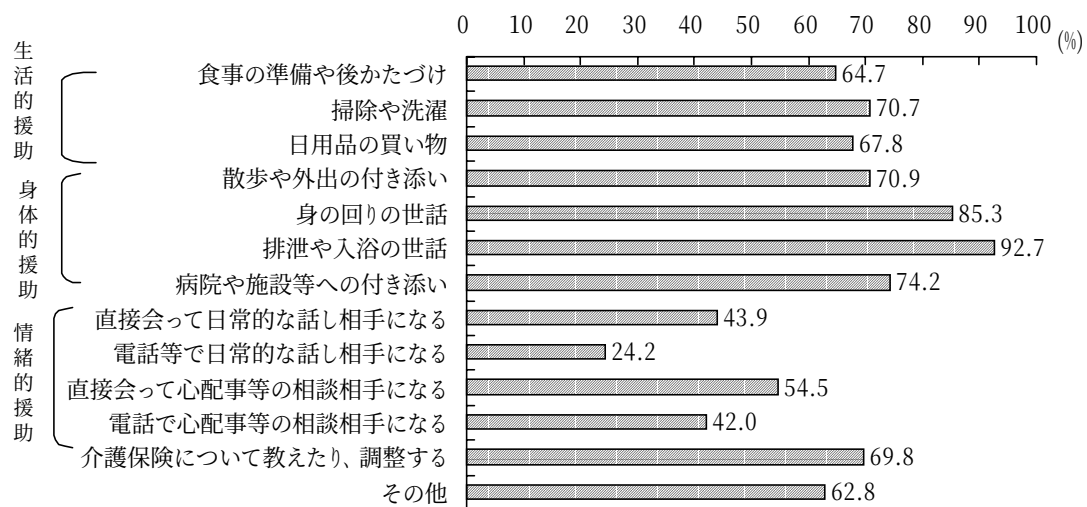
この結果、3つの負担感を比較すると、最も大きいのは精神的負担感で、特に配偶者の母親に対しては42.3%もの人が負担感を感じています。

また全般的に、配偶者の親に対しては、自分の親に対するよりも負担感は大きくなっており、特に精神的負担感では0.1%、経済的負担感では5%の水準で統計的な差がみられました。

親に対して行っている援助内容について負担を感じる割合

情緒的援助を行っている場合、娘にとって負担感は低い。

図表3 援助内容と負担感を感じる平均割合



注1：精神的、身体的、経済的負担のどれかを負担（「大いに負担を感じる」「やや負担を感じる」）とした割合

注2：4人の親の負担感割合の平均値

親に対して行っている援助の内容について、負担を感じるかどうかを聞いてみました（図表3）。

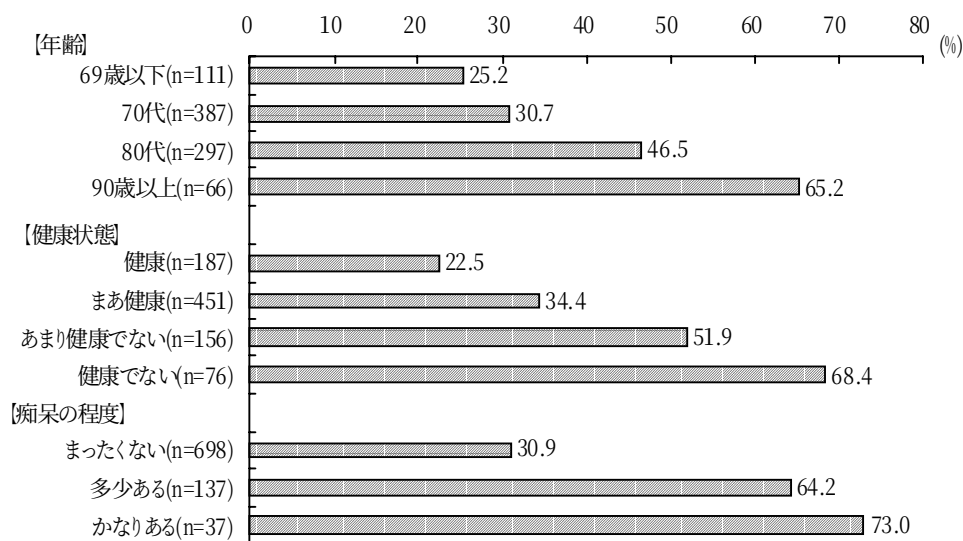
この結果、娘が最も負担を感じている援助項目は「排泄や入浴の世話」で、92.7%の人が何らかの負担感を感じています。ついで「身の回りの世話」（85.3%）、「病院や施設等への付き添い」（74.2%）の順となりました。

一方、「電話等で日常的な話し相手になる」について負担感を感じている割合は、24.2%程度に過ぎません。同じように「電話で心配事等の相談相手になる」「直接会って日常的な話し相手になる」でも負担感を感じている割合は4割程度と低くなっています。以上のよう、親に対して情緒的援助を行っている場合、娘が感じる負担感は低いようです。

親側の特性別からみた負担感割合

親の年齢が高まるにつれ、援助する娘の負担感は増大する。

図表4 負担感割合（親の年齢別、健康状態別、痴呆の程度別）



注：精神的、身体的、経済的負担のどれかを負担（「大いに負担を感じる」「やや負担を感じる」）とした割合

援助対象となっている親の特性と娘の負担感の関係を調査したところ、図表4のようになりました。

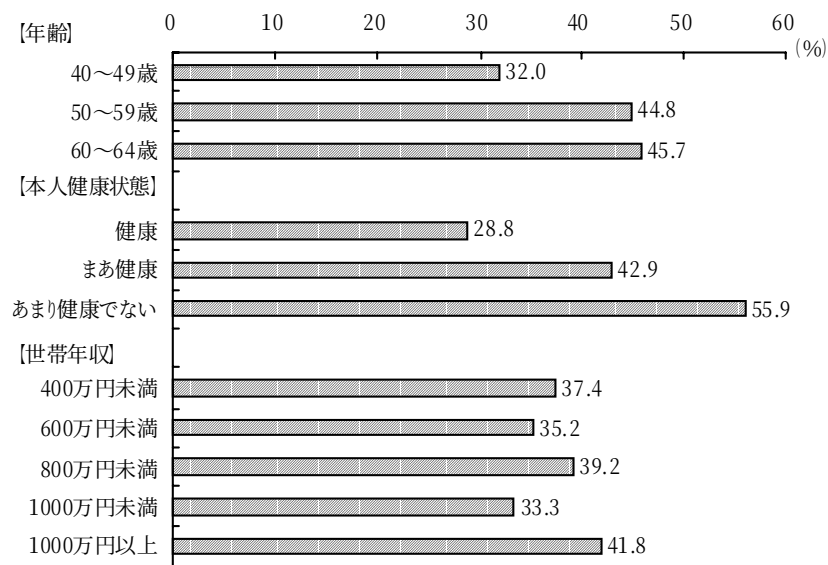
この結果から、対象者である親の年齢が高まるにつれ、援助する娘の負担感は急激に増大し、特に90歳以上の親の場合では、65.2%もの人が負担感を感じています。

また、親の健康状態、痴呆の程度も負担感に大きく影響していることがわかりましたが、これらの要素は親の年齢を中心として相互に深く関わっているようです。

娘側の特性格からみた負担感割合

援助している娘の負担感は本人の健康状態に大きく影響する。

図表5 負担感割合（娘の年齢別、健康状態別、世帯年収別）



注： 精神的、身体的、経済的負担のどれかを負担（「大いに負担を感じる」「やや負担を感じる」）とした割合

援助する娘側の特性と娘の負担感の関係を調査したところ、図表5のようになりました。

この結果から、援助している娘の年齢が49歳までの場合、負担を感じる割合は32.0%でしたが、50歳以上になると負担を感じる割合は45%前後にも上ります。ただしこれは、娘の年齢が高くなるにつれ、親の年齢も高くなるために負担感が増大したと考えられます。

次に、援助する娘の健康状態によって負担感の差は大きいことも分かりました。具体的には、援助している娘の健康状態が悪いと、それだけ負担感も増大するようです。ただし、経済的条件としての世帯年収は本人の負担感に対して特に影響を及ぼしていませんでした。

負担感に影響を及ぼす要因は？

生活的援助は負担感を増加させるが、情緒的援助は負担感を引き下げる効果がある。

図表6 負担感得点の重回帰分析結果

	要 因	標準偏回帰係数
援助内容	生活的援助 (1:している)	0.178 ***
	身体的援助 (1:している)	0.129 ***
	情緒的援助 (1:している)	-0.117 ***
対象者特性	対象者の健康状態 (4:健康)	-0.139 ***
	対象者精神的障害の程度 (3:かなりある)	0.151 ***
対象者との関係	母親タミ (1:母親)	-0.026
	配偶者親タミ (1:配偶者の親)	0.109 **
援助者本人特性	本人年齢	-0.018
	本人健康状態 (4:健康)	-0.126 ***
緩衝効果	夫の協力度 (5:協力的である)	-0.076 *
	友人・仲間関係満足度 (5:満たされている)	-0.006
自由度調整済みR ²		0.2281

***:p<0.001, **:p<0.01, *:p<0.05

負担を感じさせる要因は何であるかを重回帰分析により総合的に明らかにしてみました。ここでは「大いに負担を感じる」に3点、「やや負担を感じる」に2点、「特に感じない」に1点を配点した援助負担感得点を用いて分析を実施しました。

この結果、「食事の後かたづけ」などの生活面での援助や「排泄や入浴の世話」などの身体的援助をしていると、負担感は増加することがわかりました(図表6)。しかし、「直接会って日常的な話し相手になる」などの情緒的援助をしていると、表中の係数の符号がマイナスとなっているように、負担感を引き下げる効果をもつこともわかりました。このように、親に対する援助が必ずしも負担を増加させるのではないようです。

親の状況に関しては、親の健康状態が悪いほど負担感は増加します。同様に、親の精神的障害、すなわち痴呆の程度に関しては、障害が大きいほど援助する本人の負担感を上昇させる結果となりました。

親との関係では、配偶者の親ほど負担感を増加させる要素となっています。

また、援助する本人の状況については、年齢は関係せず、本人の健康度が悪くなると負担感が増加するようです。

最後に、負担感を緩衝させる効果についてみたところ、「困ったときに夫が協力的である」場合には統計的に有意に負担感を減少させることがわかりました。

援助負担感と生活満足度との関係

援助負担感は、生活満足度を引き下げる。

図表7 生活満足度の重回帰分析結果

要因	標準偏回帰係数
本人年齢	0.166 ***
世帯年収	0.093 ***
健康状態	0.153 ***
夫婦関係	0.406 ***
友人・仲間関係満足度	0.199 ***
援助負担感	-0.164 ***
自由度調整済みR ²	0.3603

親に対する援助が自分自身の生活満足度にどのように影響するかについて分析してみました。

この生活満足度は「7. 非常に満足」から「4. どちらともいえない」、「1. 非常に不満」までの7段階で調査しています。先の援助負担感得点と生活満足度との間の単純な相関係数は-0.226 となっており、統計的にも有意であることから、両者は密接な関係と言えます。

ただし、生活満足度は様々な要因によって影響されており、これらの影響を統制して、援助負担感だけの効果をみる必要があります。そこで、図表7に示すような変数を投入して、重回帰分析を行いました。これによると、分析で用いたすべての変数が有意な影響を及ぼしていることが分かります。そして、このような変数を統制した後でも援助負担感は明らかに生活満足度にマイナスの効果を与えることが明らかにされました。つまり、援助負担感が高まると、生活満足度が低くなっていくという構造になっていることがわかりました。

研究員のコメント

親が年取ってきて、生活に不便を来すようになったら、子どもが援助してあげるというのは、古くからの我が国の伝統とも言える習慣です。ただし、援助する人は、男性ではなく、あくまでも娘であり、嫁である女性です。最近では、こうした習慣に反発したり、あるいは否定する考え方も女性を中心に大きくなって来ています。

この理由はいくつかありますが、一つは介護保険制度ができて、親が介護を必要となったときには介護サービスといった外部サービスを利用すればよいという考え方が出てきたことが挙げられます。しかし、より大きな理由は、こうした介護や援助をすることが、精神的、身体的、それに経済的に大きな負担をもたらすことが分かってきたからではないでしょうか。ところが、このような、親に対する援助の実態やその負担感については、これまでほとんど調査・研究が行われて来ていません。

そこで、本調査ではこの点に焦点を当ててアンケート調査を実施しました。**結果は、援助している娘の負担感は大きなものがあり、特に精神的負担感は身体的負担感や経済的負担感を大きく上回っていました。**このような負担感をもたらす要因としては、援助を受ける親側では、身体的自立度や痴呆の程度といった年齢に関わる要素が効いていました。それに見逃せないのは、**自分の親よりは、配偶者の親、すなわち姑に対して援助する場合に負担感が大きくなっており、改めて嫁・姑の関係が浮き彫りにされたことです。**

しかし、援助することによる負担感を軽減する要素もあります。それは、**夫の協力度**です。援助していて、困ったときに夫が相談に乗ってくれることにより、負担感を低下させることができるのです。これを「ストレスの緩衝効果」とよぶことができますが、家族がもっと協力的になることが、娘の負担感を軽減させるのに役立つのです。

それから、援助内容について着目すると、「身の回りの世話」「排泄や入浴の世話」といった身体的援助や、「食事の後かたづけ」「掃除や洗濯」といった生活的援助は確かに、負担感を増加させる要因になっていますが、**「日常的な話し相手になる」「心配事の相談相手になる」といった情緒的援助は、どうやら負担感を引き下げる効果を持つようです。**この理由としては、情緒的援助を行うということは、援助する娘と、援助される親との間に、信頼関係がなければ成立しない援助と考えられることです。そのような信頼関係が構築されていることが負担感を軽減することになると考えられます。

このように、援助される親と援助する娘の信頼関係を作り上げることと、家族のサポートがあることが、親に対する援助の負担感を和らげることになるようです。

今回の調査は、これまでの習慣で娘が親に対して行う援助行動を分析してきました。しかしながら、時代は変わり、これからは、男性である息子も援助行動を担うことになるかもしれませんし、またそうなることが期待されます。その時には、男性も加えた援助行動の負担感を分析していく必要性が出てくるものと考えられます。

(研究開発室 主席研究員 鈴木 征男)